

両義性と流動性からみるオルタナティブな社会
—グローバル化時代への東アジアからの問い—
Alternative Society Based on the Ambiguity and Fluidity
: Challenge from East Asia to the Globalization Era

中村 則弘(Nakamura, Norihiro)
愛媛大学(Ehime University)

要約

In various studies in the past on a social transformation in East Asia, including Japan, we hardly understand the value consciousness of taking great responsibilities of activities. Thinking about the mentioned question, we can find that the importance of East Asian knowledge system which is closely related to Mandala and Chaos.

The following is “Hirano Street Remake Movement” in the Hirano area 20Km south east of Osaka, a typical example for interpreting East Asia’s Value consciousness. The basic empirical data is gathered from a direct interview for the responsible person and historical materials.

The terms of ambiguity and appropriateness that relate to Mandala and Chaos are decisive to understand the value consciousness. These bring some new ideas to the complex issues of societies and represent the possibility to regain its authority of the knowledge system.

はじめに

欧州の研究者から「リスク社会」という概念が提示され¹、モダン、モダニティとは何であったのかを考えるにつけ、または文明の衝突という歴史的に考えれば概ね虚構のような話が現実状況として見せつけられるにつけ、社会科学の研究にかかわる価値前提、世界観について根本的な違和感を持たずにはいられない。さらにいえば、大きな疑問にさいなまれている。

この違和感や疑問は、I. イリイチや玉野井芳郎の研究とも結びついていると確信している。たとえば、前者の研究は、アジア、とりわけ東アジアの世界観からの大きな展開が求められざるを得ないはずなのだが、それがなされないまま現在に至っている。しかしなが

¹ ウルリッヒ・ベックの論考についてだが、彼の指摘するプロブレマティークはよく理解できる。また、彼が結論として示す展望も納得できるものである。ただ、そうであるがゆえに、根本的な社会観や発展観、さらには知の在り方の転換が求められるべきであり、そうあってこそ「新しい近代への道」は拓かれるような気がしてならない。

ら最近になって、東アジアの歴史と西欧の社会科学に通暁した研究者から、驚嘆に値する研究が示されていることには、大いに力づけられている。それは宇野重昭とハルミ・ベフによるものである。前者による『北東アジア学への道』では、「新たな方法論の模索」における「アジアを超えるアジア学」としての枠組みから鋭い切り込みがなされている²。一方、ハルミ・ベフも社会科学の研究における暗黙の西洋的な価値前提について、人類学・社会学の領域の主要研究を素材に分析され、われわれが留意すべき課題を実に的確に提示されている³。日本とアメリカの両碩学はともに、同じような研究目標を見据えているのである。

改めて、社会科学は時代の転換点にあると思えてならない。先にも触れたように、「モダンなるもの」、「近代性」についての問いかけが、何らかの形で不可欠になっている通りである。さらにいうと、モダニティの超克などがとり取り上げられてすらいる。しかし、これまでの諸研究については、どうしても納得のいかないことがある。それは、社会科学におけるこうした問いかけが、往々にして、欧米における研究枠組みからしか捉えられていないことが多いからである。あわせて、問いかけた内容とは裏腹に、分析対象の歴史的個性を踏まえたような実証研究が、それほど見られないことである。

振り返って考えると、先に触れた問いかけに関連して重視されている内容は、かつては非合理的として切り捨てられた、東アジアにおける知の体系と親和的なものが多い。有機体論的・全体論的な方法、多様性・複雑性を重視する見方など、まさにそうである。とすれば、われわれが歴史的にみて身近な知の体系を素直に見直すことは、取りも直さず、新たな時代に向けた重要な学問的貢献になるはずではないだろうか。

ここでは実証研究の素材として、東アジアにおける地域活動の担い手の価値意識をみてゆくこととし、そこから両義性と流動性を具体的に示したものと考えられる「曼荼羅」と「混沌」の解釈からオルタナティブな社会のあり方に迫ることとする。

1. 価値前提と世界観をめぐって

中国、日本はもとより、韓国、台湾、タイ、ネパールなどこれまで調査を行ってきた地域における人々の価値意識を振り返ると、そこには非一神教的世界観が濃厚に存在し続けているように思えてならない。東アジアに寄せて考えると、とりわけ顕著なのは「無常」という観念である。「万物は生々流転するものであって、とどまることはない」のであり、そこでは必然性とあわせて偶然性が大きな意味をもっている。それは「一期一会」という観念にこそ明確に集約されている。もちろんのことながら、「空」や「渾沌」は、西洋的な

² 宇野重昭『北東アジア社会学への道』国際書院,2012年,40~43ページ。宇野は近代のアイデンティティとはという問いを軸に、中国と日本のモダニティを竹内好や魯迅の分析を踏まえた歴史文脈から検討している。

³ 香港大学で2010年に行われたワークショップにおける発表、およびワーキングペーパーからのものである。なお、この報告内容は日本の風響社から論文として出版される予定である旨を聞き及んでいる。なお、参考文献に記したハルミ・ベフ（別府春海）の『イデオロギーとしての日本文化論』は現在においても示唆にとんでいる。

ニヒリズムやカオスにつながるものではなく、恐怖の対象などでもない。それはむしろ、高い意義が与えられている。

また、多様な価値観の併存ということも顕著である。これは多元主義などとは異なる、根源的な多様性の承認なのである。これはこれで重要な議論なのだが、ここでは立ち入らないこととする。この根源的多様性は、概ね両義的な世界に集約されているのではないかとみている。

こうした多様性の承認は、単一化された普遍的、合理的秩序にあくなく価値前提を置く人々からは、混乱や乱雑として把握されがちである。ただ、ネパール社会の状況などをみると、明らかに整序化された単一の秩序を拒否しているのではないか、と思われる節が多々見られる。いわゆるモダニティが形成できないのではなく、暗黙の裡にそれを拒否していると思う。そう考えれば、かつて東南アジア社会の議論での「二重経済論」⁴などにも新たな光があてられるであろうと確信している。もちろん、根源的な多様性の承認は、東アジア全域においても、表面上はともかくも、深いレベルで明確にみられている。ちなみに、先に述べた「無常」ということも、多様性の承認と親和的な関係にある。

さて、ここに示した内容は、仏教や儒教、道教やヒンドゥ教、さらには神道など、非一神教として創唱宗教や体系だった自然宗教の世界観を示したものに他ならないのである。総じていえば、「西洋の衝撃」を除外して考えればだが、万物の生々流転や万物の根源的多様性を前提とする考え方からは、事物の相互補完と共存、事物の相互流動と調和が重視されなければならなかったはずである。共存と調和という価値前提は、現代社会の諸問題を考える上で、重要な意味をもっていることは自明と言ってよいだろう。また、欧米の研究などにおいても、これまでの価値前提を見直す動きが見られているように感じられてならないし、課題はアジアに向けてこそ投げかけられているようにすら思える。考えてみれば、アジアは「黄禍」をもたらす地でもあったが、イエスの生誕を祝福したのは、誰であろう東方の賢者だったのである。

最後に、東アジア社会にかかわる従来の学術著作において、明らかに意図的に、上に述べた発想にたったものが見られたことを強調しておきたい。われわれが取り組みを進める糸口は、すでに示されているのである。日本の例でいえば、柳田國男の民俗学の論考である。一連の著作では、自己主張や主体性、欧米的な論理展開を周到に回避しており、明らかに日本、東アジアの発想にもとづく考察・記述を目指している。あわせて、南方熊楠の諸著作も重要である。彼の一連の論考は、欧米的な論理展開を理解しつつも、その分析は事物の複雑性を根本におくという極めてユニークなものである⁵。とりわけ、「十二支考」

⁴ J.H.ブーケのインドネシア経済のあり方を素材とした二重社会の著作を参照されたい。

⁵ 南方の自然科学分野の主たる分析対象が「粘菌」であったということも忘れてはならない。これは動物的性質と植物的性質を併せ持つ、いわば両義性に満ちた生物である。また、変形体であるということは、流動性と親和的な性質をもつ生物であるとも考えられる。

などは秀逸であり、示唆にとんだものと思えてならない⁶。さらに、南方の考察は博物的知識にもとづいており、その方法については、独断的発想を排除し、事実確認を重んじた中国の考証学と親和的な一面ももっている⁷。

2. 地域活動の担い手からみる東アジアの価値意識

両義性と流動性とかかわる価値意識について、ここでは地域活動の担い手から考えてゆきたい。地域という種々の関係性が交錯する「場」、「器」における活動の担い手は、価値意識のあり様についての妥当な考察対象と思えるからである。この地域活動について、東アジア的な価値意識が典型的に示されている事例として、大阪市平野区平野のまちづくり活動を取りあげることとする。

平野区は大阪市の南東部にあり、東住吉区から1974年に分区し成立した新しい区である。その位置については、図1を参照されたい。市内では第三位の面積を有しており、人口は20万人を超えて市内各区では第1位となっている。戦後、農地や空き地が市内としては比較的多く残っていたことがあり、公営住宅が数多く建築され、借家も多くつくられた。そのこともあり、住民の年齢構成は市内平均と比べ、若い世代の割合が高くなっている⁸。

まちづくり活動との関連で重要性をもつ特徴は、この区の中心地一帯が、歴史的な環濠集落であり、江戸時代において平野庄とよばれる在郷町であったことがあげられる。戦国時代には、堺と並ぶ自治都市を形成していたのである⁹。在郷町としての町割りは、図2として示しておいた。これから述べる「平野のまちづくりを考える会」の活動は、在郷町としての地域の歴史と不可分の関わりをもっている。草の根の自治を維持するために、権力者との対抗の歴史が繰り広げられてきたことは、驚嘆に値する。ただし、このことに立ち入ると、この論考で扱い得る範囲を超えるものになってしまうので、あえてこのことを指摘するに留める¹⁰。

⁶ 南方は十二支考において、いわば西洋的因果律とは異なる対象分析を試みているといえる。

⁷ 南方の一連の研究については、鶴見和子が適切な分析を加えている。鶴見の一連の論考を参照。

⁸ 最新の資料ということで大阪市平野区の公式HPの数値を参考にした。

⁹ 歴史的な状況と経緯については、平野区誌編集委員会編『平野区誌』が100~160頁において的確にまとめている。

¹⁰ なお、同区のまちづくり活動には、いわば官製であり、地域福祉活動の推進を目的とする「和っしょい！ひらの」というものもある。こちらについては、取り立てて示すだけの特色はみられないように思われる。



大阪市中之島図書館作成図を一部修正

図1 平野区的位置



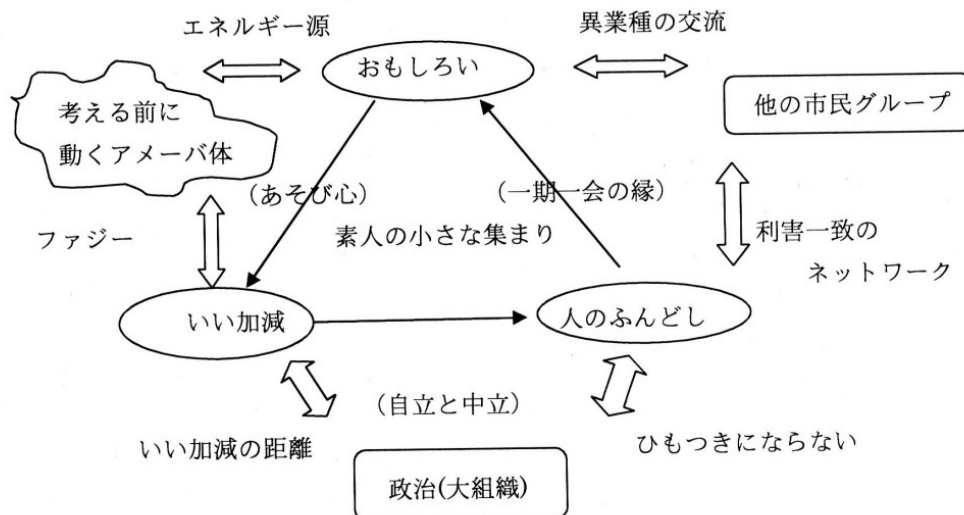
「摂州平野大繪圖」を一部修正

図2 在郷町平野の町割り

廃線となる南海電鉄平野線の平野駅舎保存運動を契機として、1980年からはじまった「まちづくり活動」は、「平野のまちづくりを考える会」が主体となって行われている。具体的な活動内容は、1)「平野町ぐるみ博物館」の開設であり、個人が収集したお宝を、遊び心を活かし、ボランティアで町中の民家に展示する、2)「女ぐみ活動」として昔ながらの歌や遊びを次世代に伝える試みを行う、3)「建物の修復活動」で大阪市の事業と連携して古民家の保存・修復を行う、ということである。そのほか、4)ベートベンの交響曲第九番を「平野弁」で歌うという合唱コンサートを大晦日に行い、5)フリーマーケットを地元神社で月1回開催している。

平野における「まちづくりを考える会」の活動は、「おもしろい」、「いい加減」、「人の禰で相撲をとる」という三大原則としている。「おもしろい」ということについては、面白いことをするというのは、活動の一番のエネルギー源だということからであった。つぎに、「いい加減」については、面白いことを、きちんとやっても面白くない。面白くするためには、いい加減にやらなければならない。これはものごとを実行に移すために必要不可欠と考えたからという。最後に「人の禰で相撲をとる」というのは、会費を徴収せず、どのような組織にも属していないので活動資金が乏しい。頭と体を使うのはもちろんだが、とにかく「人の懐」をあてにすることを考えてやっぺいこうとの思いからであった。なお、「人のふんどし」については、資金面の話であり、価値意識とは直接関係しない。そのため、とりあえず、この内容は除外して考えることとする。

平野まちづくり活動の概要を図として示せば、下の図3の通りとなる。



「平野のまちづくりを考える会」の資料にもとづいて作成
 図3 平野まちづくり活動の概要

この活動の担い手の価値意識について、図3を参照しつつみておこう。この図はそれを端的にまとめたものとなっている。まず着目したいのは、活動展開の前提となっている、いわば全体をとりまいているような価値意識である。「ファジー」、「一期一会の縁」、「いい加減の距離」、「ひもつきにならない」、「異業種の交流」、「利害一致のネットワーク」ということがらが、これと係わっている。

これらの相互関連をまとめれば、次の通りとなる。「一期一会」という偶然を活かし、「ファジー」なつながりをつくる。そして、のびのびと活動するために他者とは「いい加減の距離」を保ち、他者の禪は借りても「ひもつき」にはならないというのである。さらに、「異業種」という異なる持ち味の個人・団体との交流・ネットワーキングというような、多様性を前提としたつながりを重視するということである。これら全体は「素人の小さな集まり」としてまとめられるのである。

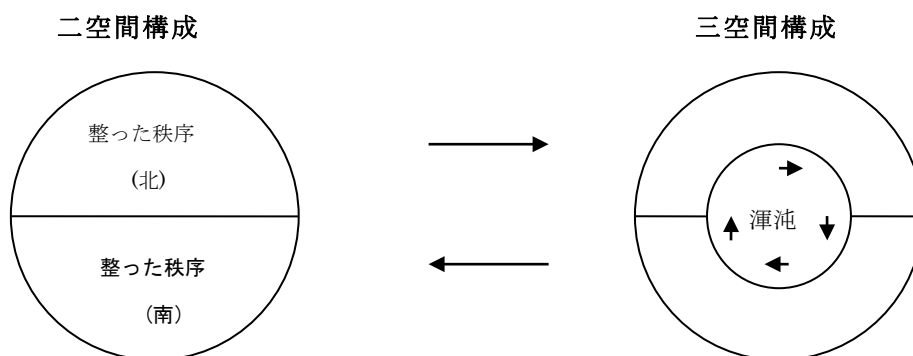
さらに、「会長なし、会則なし、会費なし」の「三ない」を旨としているこの会の運営については、次のような四つの特色がある。第一に、月1度の定期会合に参加した者が会員として扱われる。そのため、会員は固定したものではなく、その時々に変化する。当然ながら、会員名簿の類は存在しない。第二に、考える会の活動は提案者が責任者となり、賛同者が運営担当者となる。会員たちは自分ができる範囲で協力することとなる。第三に、活動の評価については、「提案内容を実現できたかどうか」だけが基準とされる。「人がどれくらい集まったか」、「新聞やテレビに取り上げられたか」などということは全く考慮されない。第四に、活動が継続できるかどうかは、運営の責任者と担当者、参加者の思いに

力の源である「おもしろさ」を活かし続けるため、秩序づけることは回避し、「ファジー」な「いい加減」さを保ち続けることが大事とされているのである。

この内容は荘子の云う「混沌」ときわめて親和的なのではないだろうか。まず、混沌の説を示しておこう。

南海之帝為儵，北海之帝為忽，中央之帝為渾沌。儵與忽時相與遇於渾沌之地，渾沌待之甚善。儵與忽謀報渾沌之德，曰：「人皆有七竅以視聽食息，此獨無有，嘗試鑿之。」日鑿一竅，七日而渾沌死〔莊子，応帝王編，第七〕

この「混沌の云い」から着目すべき内容をかいつまんで触れておく。まず、北と南の各々の「帝」に象徴される秩序だった世界がある。その中心に混沌は生じることとなる。混沌はいわば境界でもあり、北と南の秩序を受け入れ、相互交流と相互活力をつくりだす場となる。しかし、七つの穴を穿つというように、秩序づけられたとき、混沌は死滅するというのである。これを、山田慶児の論考を参考にしつつ図式化すれば、図6の通りとなる。



山田慶児『混沌の海へ—中国的思考の構造』朝日新聞社，1982年，p. 297 および p. 301 を修正の上で作成

図6 空間構造からみた混沌

なお、混沌については、別稿ですでにある程度論じている¹²。そこでここでは、「平野のまちづくりを考える会」の活動と関連する内容に限定して記すことにする。

混沌はものごとの両義性と流動性の持つ意義を示している。混沌の生成は神話によれば、人間の英雄的試みによるという。それは、平野のまちづくりからいえば、「おもしろさ」にもとづく取り組みであり、発案者と賛同者の「発心」ということになる。ただし、それは混沌と同じように儂さ(はかなさ)が付きまとっている。また、背後に自己反省というこ

¹² 中村則弘「渾沌と社会変動」(中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化』明石書店、2008年)を参照されたい。

とを含意している。多様な価値観を受け入れ、流動しなければ、まちづくり活動での取り組みは死滅してしまうのである。まさに「考える前に動き」つづけること、動きながら考えることが大事となるのである。そして、「ファジー」さ、「いい加減」さを保ちながら、多様な価値観を受け入れ、活力を維持し続けるのである。

平野のまちづくり活動を通して混沌を捉えなおせば、それは複雑性にもとづくダイナミズムを見事に示したものであったと理解できよう。またそれは、民衆レベルでの異なる価値観・世界が共存しつつ調和し、不断に新たな活力をつくり出すための「知恵」をまとめたものに他ならなかったともいえよう。

3. 曼荼羅および渾沌の世界の危機

「平野のまちづくりを考える会」のような活動が、東アジア全域において明確な形では見出しがたくなっていることも事実である。ともあれ、両義性・流動性と密接にかかわる曼荼羅、渾沌の世界は、意図的に復権を目指す必要があるように思えてならない。これはまさに、現代をとりまく歴史的現実に対する「渾沌の云い」からの対応ともなっている。ここでは、近代において曼荼羅の世界、渾沌的世界の解体が強く求められた例を取り上げておきたい。

東アジアにおけるこうした解体は、「西洋の衝撃」によって引き起こされたものであり、近代への対応としてなされたものと断言できる。ここでは中国と日本における、2つの歴史的事例をとりあげておく。一つは「文化大革命」であり、いま一つは「廃仏毀釈」およびそれと関連した日本の軍国主義である。ただし、これらの経緯についてはよく知られており、ここで詳述することは避ける。

まず、文化大革命(1966~1975)である。これは、中国的な社会主義運動、毛沢東の権力闘争などいろいろな角度から語られている。ただ、価値意識に関連して捉えると、きわめて興味深い。それは、毛沢東主義という単一の価値体系を樹立しようとしたことである。別の面では、基本的に儒教、道教、仏教、民間宗教、祖先崇拝が相互共存し、相互触発するという中国の曼荼羅的、混沌的な世界を崩壊させることを意図したものとなっていた。ちなみに、支配道徳とされた儒教においては、「怪、力、乱、神を語らず」というように、異なる価値意識との共存を前提としていたのである¹³。

つぎに、廃仏毀釈と軍国主義である。明治政府が推進しようとした廃仏毀釈(1868~1871)は、神道と仏教の融合の解消から、外来のものであるという理由づけから仏教の排斥を試みたものであった。その背後にあったのは、国民を統合する精神的支柱としての国家神道という、こちらも単一の価値体系の樹立であった。これもまた、曼荼羅的・渾沌的な両義的かつ流動的な世界観の解体を目指したものに他ならない。

この廃仏毀釈は数年間で終わりをみるが、国家神道的な単一の価値体系は、日本の軍国

¹³ 歴史的にみた中国における異なる価値観の共存については、中村が『台頭する私営企業主と変動する中国社会』ミネルヴァ書房,2005年,159~161頁においてまとめている。

主義のなかに強く残存することとなった。仏教との関係は言うに及ばず、神道との間でも不整合な位置を保ってきた。このことは、いまにおいても神社本庁と靖国神社の関係から明らかである¹⁴。

ともあれ、非一神教的世界が諸価値体系をなしてきた東アジアでは、両義性や流動性に積極的な意味づけを与えることから、有機的、安定的な文明を長期にわたって維持してきたと考えるとよいのではないだろうか。そこにみられたものは、多様な価値体系の共存と調和であったと思えてならない。西欧の衝撃は、何らかの形で単一の価値体系の樹立を求めさせたのであり、こうした文明を支えてきた内面の世界を崩壊の危機に晒したとみなすことができる。

ここで注記しておきたいのは、先に述べた諸運動はさしたる成果をあげることなく終結したことである。文化大革命は実質的に2-3年しか行われ得ず、廃仏毀釈も同様であった。日本の軍国主義も、アメリカの圧倒的な力を前に、組織の内部崩壊と空洞化を招きつつ自滅した。これは東アジアにおける曼荼羅的、渾沌的な世界の根深さ、力強さを示しているものに他ならないだろう。ただし、こうした世界は理解不能なものや否定的なもの扱われがちなのは事実である。このことが、明確な形での表出を抑制する役割を果たしているとみてよい。ちなみに、こうした抑制に大きく寄与しているは、ギリシア・ローマ思想とキリスト教精神を暗黙の前提とした社会科学と、そのディシプリンを身につけた研究者なのかもしれない。

最後となったが、グローバリズムの進展という新たな時代状況の中で、ともすれば、曼荼羅と渾沌の世界は、全く新たな危機に直面しつつあるとみられる。ただし、このことにかかわる論述は別稿に譲りたい。

4. 東アジアからのオルタナティブに向けて

曼荼羅のような多様な価値意識のあり方、そして混沌にみられるような複雑さのダイナミズムを活かす実践意識は、非一神教の東アジアにおける民衆世界の重要な特徴の一つとなっていたといえよう。このことは決して平野のまちづくり運動に限定される話ではないからである。日本における内発的發展と企業家の調査、中国の私営企業主調査、少数民族地域を中心とする中国の底辺階級調査のなかでも、基本的に類似した特徴をもつことを確認している。ただし、「西洋の衝撃」との関係で、曼荼羅と渾沌の世界を生かした実践がたびたび危機に瀕したことも忘れてはならない。

ここでみた東アジアの事例からは、「ファジー」で「いい加減」ななかにこそ、寛容さと活力は保ち続けられるのだと考えられる。それは一面で、特定のことがらへの執着を逃れ、のびのびと新たに事物をつくりだし続けることをも示している¹⁵。このことは、主体性と

¹⁴ 高橋哲哉の靖国神社にかかわる論考は、国家神道とその背後にある歴史観の問題性に鋭く切り込んでいる。

¹⁵ この面で、イリイチの論考は示唆にとんでいる。また、ここで示した見方が、欧米社会の

ということと密接に関連してくる。新たな事物は、生きるなかで直面した問題や課題の解決のための、あるいは関心をもった内容の解明のための実践的、継続的な取り組みからつくりだされただけだったのではないか。こうした取り組みのあり様は何らかの自己反省と結びついていることが多く、「主体」であるというような「拘り(こだわり)」とは基本的に無縁である。そろそろわれわれは、主体性ではなく、万物の生成流転ということを根本に据えた、自己反省と結びついた「志」や「発心」ということを基本に据えた分析に挑まなければならないのかも知れない。

平野におけるまちづくりの事例を、両義性・流動性にかかわる曼荼羅と渾沌の世界に敷衍して考えれば、西欧近代がもたらした発展観・価値観に対するオルタナティブを示すことができる。歴史的現実を考えれば、いささか絵空事であることは十分に承知しているが、あえて示しておきたい。(1)主体性を考慮しない、ないしはそれを超えた人間の、各々の持ち味を活かした集まりが重視され、(2)担い手そのものが相互転換、相互流動する。(3)その集まりは、あらゆる者を抱合し、(4)その接触でもたらさる「発心」から新たな事物を不断につくりだす。(5)万物は生々流転しているとの認識から、必然性と並んで偶然性に重きをおき、(6)物事への執着から離れた生き方をする。

これらの内容は、現代社会が求めていると「共存」と「調和」の実現、人間らしい生活の復権、そして新たな社会構築に向けたダイナミズムを考える上で、きわめて示唆にとんでいる。「神々の戦い」や利害衝突を繰り返さず近代社会の歴史的現実を見る限り、この思いはしきりである。四大発明が西洋のルネサンスに多大な影響を与えたように、逆説的にはあるが、東方の賢人がイエスの誕生を祝福したように、われわれこそが西洋が作り出した近代社会の歴史的意味を位置づけ、曼荼羅や渾沌の内容が示すオルタナティブな社会構想を示すべき秋(とき)に至っているのではないだろうか。

なお、本論文の作成には、科学研究費補助金(B)「チャイニーズネスの実証的研究：グローバリズムとの関連から」(課題番号:23402007)の支給をうけた。

【参考文献】

ベフ・ハルミ『イデオロギーとしての日本文化論』思の科学社、1987年。

Beck, U., *Risikogesellschaft, Auf den Weg in eine andere Modernem*, Suhrkamp Verlag, 1986(東廉・伊藤美登里訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版会, 1998年)。

Boeke, J. H., *Economics and economic policy of dual societies: as exemplified by*

これからの考える上でも重要な意味をもつことを暗示している。

Indonesia,

New York: Institute of Pacific Relations, 1953(永易浩一訳『二重経済論—インドネシア社会における経済構造分析』秋董書房, 1979年。

平野区誌編集委員会編『平野区誌』平野区誌刊行委員会, 平成17年5月。

Ilich, Ivan, *Cerebration of Awareness: A Call for Industrial Revolution*, Introduction by Erich Fromm, Heyday Books, Berkeley, 1970.

井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣, 2005年。

南方熊楠「十二支考」(『南方熊楠全集』第一巻, 1979年, 平凡社)。

中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化——新たな社会の構想を求めて』明石書店, 2008年。

中村則弘『脱オリエンタリズムと日本における内発的発展』東京経済情報出版, 2005年。

——『台頭する私営企業主と変動する中国社会』ミネルヴァ書房, 2005年。

Needham, Joseph, *The Grand Titration: Science and Society in East and West*, George Allen & Unwin Ltd., 1969(橋本敬造訳『文明の滴定——科学技術と中国社会』, 法政大学出版会, 1975年)。

高橋哲哉『靖国問題』筑摩書房, 2005年。

鶴見和子『南方熊楠・萃点の思想——未来のパラダイム転換に向けて』藤原書店, 2001年。

——『殺されたもののゆくえ——わたしの民俗学ノート』, はる書房, 1985年。

宇野重昭『北東アジア社会学への道』国際書院, 2011年。

山田慶児『混沌の海へ——中国的思考の構造』朝日新聞社, 1982年。

山田史生『渾沌への視座——哲学としての華嚴仏教』春秋社, 2002年。